『魏志』倭人伝

下戸（被支配者層）と大人（首長層）とが道で出会うと、（下戸は）しりごみして（道の脇の）草むらに入（って道を譲）り、言葉を伝えて何か言う場合には、うずくまったり、ひざまづいたりする。両手は地面につけて、大人に対して敬意を表す。……

その国（倭国）はもともと男性を王としていた。それが七、八十年続いたところで、倭国は（政情が）乱れ、おたがいに攻撃しあい、年月が過ぎた。そこでともに一人の女性を擁立して王とした。その（女王の）名を卑弥呼といった。鬼道（呪術）を得意とし、よく民衆を操った。年は既に成年に達していたが、配偶者はいなかった。弟がいて、補佐して国を治めていた。（卑弥呼が）王となってからは、（その姿を）見たことがある者は少なかった。婢千人にかしずかれていた。ただ一人の男性が、飲食の世話をし、言葉を伝達して（卑弥呼の）居所に出入りした。

……卑弥呼が死去し、大きな墓が作られた。直径は百余歩（一五〇メートル余り）で、奴婢百人余りがともに葬られた。ふたたび男王が擁立されたが、国内（の人々）は従わず、たがいに殺しあった。この際に千人余りが殺された。そこで卑弥呼の一族の女性で壹与という十三歳の女性を擁立して王とした。国内はついに安定した。……